令和2年度 学校評価総括表

教育目標		日本国憲法、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の基本精神に基づき、人権を尊重する民主的な社会の形成者として、豊かな人間性と創造性を備えた生徒の育成を目指す。				総合評価
運営方針		生徒の学ぶ意欲を高め、魅力と活力ある学校作りのために教職員が一丸となって教育活動に取り組む。				B
令和元年度の成果と課題		本年度重点目標	具体的目標			
<p>基本的な生活習慣の定着や規範意識の向上については、一定の成果はみられるが今後も引き続き「挨拶励行、正しい身だしなみ、時間厳守」の3項目について重点的に取り組む必要がある。販売実習や地域との交流を通じては、社会貢献度が高いと評価をいただいたが、さらなる地域の活性化に努めていきたい。また、学習面においては、教員の授業力向上を図り、生徒の学力向上や検定取得に向けた取組を深め、生徒が主体的に進路決定できる体制の整備に努める。</p>		社会で通用する人材の育成	確かな学力の育成 ・「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善 ・資格取得の推進			
			豊かな人間性の育成 ・体験的な学習活動の充実 ・人権感覚を高める取組を推進			
			たくましい心身の育成 ・食育の推進 ・部活動への積極的加入			
評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 および改善方策
総務部	①各行事について関係諸団体や校内各分掌と連携を密に取り組む。	総務部内での役割分担を明確にすると共に、部員お互いが進捗状況を確認しながら協力して事を進める。	B	特定の教員に仕事の偏りが見られたが、急な対応にも臨機応変に対応出来た。	各部署間の声かけ、コミュニケーションを図ると共に、分掌統合による総務部の仕事内容の見直しも必要。	コロナ禍により、従来どおりの活動ができない中で、いかに柔軟に対応できるかというところは社会人になっても必要な力であり、その対応力を生徒がしっかり身に付けられるよう取り組んで欲しい。 防災について、1.17や3.11を直接体験していない生徒にしっかり伝えて欲しい。
	②環境美化を通じて公共心を育成すると共に感染症対策の啓発にも取り組む。	教室やトイレなど共用箇所について、正しく使用する必要性をHR等を通じて展開する。また各掃除箇所での石けんや消毒液の点検を徹底しポスターなどで感染症対策を周知する。	B	ゴミの分別は比較的出来ていたが、石けん・消毒液などの消耗品の補充が出来ていなかった。	月末大掃除などを実施することにより、更なる環境美化に対する意識の向上を図ると共に、感染症対策の徹底も図る。	
	③防災意識の向上	今後起こりうる様々な災害に向けて普段から防災・減災意識を持つように実践的な防災訓練を企画・実施する。	B	コロナ禍の中で最低限の取り組みは出来たが細部での実施は出来なかった。	年度当初の避難経路図掲示の際に、防災意識の向上を図ると共に1.17や3.11に生徒への啓発活動を実施する。	
教務部	①基礎学力の充実	本年度より、BasicStudyタイムを朝学に。各学年で、内容の充実を図る。また、自ら学び自ら考える主体的な学習姿勢を育てるために、宿題・課題の内容の充実を図る。	C	コロナの影響もあり、なかなか実施できなかった。来年度、内容も含めて検討していきたい。	社会状況を見ながら、校時を検討し、そのうえで実施の有無、内容を検討していきたい。	
	②授業力の向上	分かる授業の実践及び授業の工夫改善のため、年2回の公開授業並びに研究協議の実施に努める。また観点別評価について考察し、成績評価の在り方を検討する。	B	公開授業、研究協議について例年通り実施できた。観点別評価については、まだまだ教科や担当者によって差があるのが現状である。	引き続き、学びの質向上のため、実施していく。観点別評価は、来年度より全クラス・全科目で実施する。	
	③教育課程の検討	県立商業高校開校に向けて、また、新学習指導要領を視野に入れた教育課程を検討する。	B	学科ごとの特性に合わせて教育課程を編成した。	細かなところで、手直しが必要な部分もあるが、さらに検討していきたい。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 および改善方策		
生徒指導部	①正しい身だしなみに対する意識の向上	登下校時や授業の始業終業時、校門指導等を通じて、生徒の小さな変化を見逃さず、身だしなみ等についての指導を継続し、意識の向上を図る。	B	校門指導等においては、服装だけでなく頭髪等も気になった生徒には声かけをしている。休み時間等の廊下では服装について注意することが多い。	授業の始業終業時の挨拶は、全員の身だしなみが整ってから挨拶をする等、小さな見逃しのないようにそれぞれが粘り強く取り組む必要がある。	専門性の大切さは勿論だが、社会に出て活躍する生徒に、仲間の大切さや言葉遣い等の基本的な生活習慣も身に付けてあげて欲しい。		
	②礼法・マナーを身につけさせる指導	生徒が自分から明るい挨拶ができる、きれいな言葉遣いを気をつけることができるようになるために、職員側からの声かけや注意、指導を活発に行っていく。	B				朝の校門では自分から挨拶ができる生徒は増えてきているが、教員側からの声かけを待つ生徒もいる。言葉遣いは相手によって使い分ける生徒が多い。	生徒会による挨拶運動等は効果が高いため、今後も継続していく。自分からできない生徒には教員からの声かけはきっかけになるため、活発に声かけできるようにしていく。
	③規則正しい生活習慣の確立	規則正しい生活習慣を身に付けさせることにより、遅刻や欠席・早退を減らす。遅刻については繰り返す生徒に対し、生活習慣の見直しや意識の改善を促し、時間を守る意識の向上を図る。	B				欠席や早退は感染症対策の側面もあるため、数値のみで考えることは難しい。遅刻については体調面で不安を持つ生徒が多く、増加の傾向にある。	遅刻＝怠惰というイメージもあるが、不注意や寝坊だけでない遅刻も多く、ひとくりに遅刻を考えることが難しくなっている。遅刻指導のあり方を検討していく。
進路指導部	①自己分析	集会やしんろNEWS、面談などを通して自分を見つめ生き方について考えさせる。	B	コロナ禍で集会は数多く実施できなかった。3年生の就職希望者についてはほぼ全員保護者とともに面接をした。	生徒が興味・関心を持つ話題を中心とし、進路実現の成功例をデータを用いて提示していきたい。就職のみならず進学面談も実施していきたい。	様々な制限がある中で、進路指導や人権教育等は工夫を凝らして成果をあげている。		
	②就職先の開拓	企業との連携を密にし、求人への依頼と情報収集に努める。求人依頼状を150社以上に発送し、企業訪問および電話依頼を30社以上行う。	B				求人依頼状は180社に送付し、企業訪問も40社実施した。	勤労目的・意欲を生徒に伝えながら、求人依頼の訪問や電話などさらに開拓に邁進したい。
	③多様な入試制度の活用	専門科目で取得した資格を活用した入試制度を積極的に利用し、大学進学者数の増加を目指す。	C				大学進学者数は増加させることはできなかったが、短期大学には昨年より10名多く進学した。	求人数が多くかつ学びを深められる大学・短大進学を促す。また専門学校は将来の職業につながっているかを確認しながら進路指導をする。
人権教育部	①あらゆる差別に対しての生徒、職員の人権意識向上	新型コロナウイルスに関連した暴言や差別的言辞に対し、感染症に関する人権啓発資料を準備し、生徒、職員が差別解消に向けた取り組みができる一助を担う。	A	啓発資料の提示は複数回行い、研修実施もできた。人権クラブの「献血協力運動」を積極的にサポートし、10数年ぶりの学校での献血をおこなうことができた。	献血協力運動は、一人っきりの人権クラブ員の存在があればこそであったが、部員は卒業していきなくなり、来年度の献血協力など、活動の予定が立たない状態である。	献血について、生徒のみならず、保護者にも声をかけ積極的に行って欲しい。		
	②違いを豊かさにつなげるHR展開	各学年のHRを利用し、ネットリテラシー、性的マイノリティ、男女共同参画、在日外国人問題等を学習する機会を持ち、共生社会に向けた意識向上をめざす。	A				『なかまとともに』の積極的な活用を行うことができた。とくに進路保障・男女共同参画社会・在日外国人問題・性的マイノリティ・障害者問題について活用できた。	1学期の間、種々のホームルームが実施できなかった影響は大きく、とくにネットリテラシー、SNSなどの差別事象とそれへの対策に充分時間がとれなかった。
	③先行きの見えない危機の時代に対応した進路保障	経済困難から大学生活をあきらめる事例が相次いでいることを受け、借金に頼る進学だけでなく、生徒が自立する方向を探り、進路保障について生徒の支援をおこなう。	A				県の就学奨励金、学生支援機構の予約奨学金、その他の給付型奨学金のあっせんについては、あらゆる機会に呼びかけることができた。	「進学してキャリアをつける」のもよいが、高額の借金をして進学を勧めるだけでなく、こういう時代だからこそ、公務員試験受験もふくめて就職を達成させる「反貧困学習」が必要ではないか。
文化図書部	①読書習慣の確立による基礎力の向上	親しみやすく魅力的な図書室作りに努め、1日の利用者30名以上を目標とする。読書習慣の確立により落ち着いた学習態度を育成し基礎力の向上を図る。	B	図書室の1日あたりの利用者数は、23.6人であった。読書週間にあわせ朝の読書を行った。朝から落ち着いて授業に取り組める静かな雰囲気となった。	今年度は登校時間が制限された期間があり、図書室の利用が少なかった。次年度はWebによる蔵書検索システムを導入し、利用者の増加を図りたい。			
	②文化祭の充実・向上	生徒会・学年・文化部との連携を密にしながら、全校体制で文化祭に取り組み、生徒の積極的な活動を促すことにより、自主性と協調性を向上させる。	B				感染症対策で、例年とは異なる開催となったが、限られた範囲の中でそれぞれが工夫を凝らし、発表を行うことができた。	これまでの開催方法を踏襲するだけではなく、発表方法や内容について、新しい生活様式にあった開催方法について検討していきたい。
	③地域との連携	「桜井冬のプチ文化祭」等を通じて、地域及び他校との連携を深める。	C				今年度は感染症対策のため、「桜井冬のプチ文化祭」は中止となった。	プチ文化祭だけではなく、様々な場面や方法で地域や他校との連携が深められるように努力する。

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 および改善方策
保健体育部	①体力の向上と部活動の活性化	トレーニング方法の工夫や事前指導を実施し体力テストで県平均を4種目以上上回る。女子の運動部加入率25%以上を目指す。	B	授業中のトレーニングや事前の指導を行ったが県平均を上回ったのは3年男子と2年女子の3種目であった。また、女子の運動部員の加入率はマネージャーを入れて25.9%であった。	今年度はコロナの影響もあり思うような授業も出来なかった。来年度も引き続き授業で取り組んでいきたい。	
	②保健指導の推進	教科保健の授業や保健だよりを通して、生徒の健康に対する意識を高める。各種検診の精検受診率20%以上を目指す。	B	保健だより掲示物等を通して意識を高めることが出来た。精検率は心電図は100%であったが他は目標値に届かなかった。三学期に再度の勧告書を配布した。	保健だよりは保健室経営の重要なツールのひとつとして捉え、紙媒体だけでなくホームページへの掲載も考えたい。精検の重要性を知らせ担任を通じて連携を図り精検未受者を減らしたい。	
	③食育の充実	教科保健の授業や食育だよりを通して、食育の充実を図る。朝食摂取率75%以上を目指す。	B	保健の授業や食育便りを通して生徒に指導してきたが今年度は66%と昨年度より下がるという結果に終わった。	今まで以上に朝食の摂取の大切さを保健の授業や食育便りまたは新しい取り組みを考える。	
商業科	①検定取得の向上	習熟別講座の開講と各種検定に向けた補充講座の充実を図り進路実現に繋げた指導を行う。教員個々に数値的な目標を設定する。	B	全商検定各種において、1年簿記3級(88%)・2年会計(78%)、1年情処3級(87%)2級(45%)・2年2級(58%)、1年商経(88%)・2年(60%)とよく健闘した結果である。しかし、一部生徒に欠席があったり、やる気が見られない様子があった。また、補習の方法や部活動との両立などの課題がある。	資格の必要性や、検定受験の意義を、生徒に説明しきちんと理解させる。また、日々の授業において理解度を見極め、早急に対応を取る。また、検定補習の在り方として、指導者の人数の増員や連携を密にしていく。再度、検定補習の詳細について話し合う場を設ける。	商業科の検定取得は専門分野であるため、引き続き高い目標で努めることを期待する。
	②実学教育の充実	模擬株式会社たまつえを軸に販売実習や商品開発などの体験的な学習をさらに深める取組を図る。地域と共に諸活動を行い、連携を深めていく。	B	コロナ禍にもかかわらず、出来る範囲での販売実習が実現できた。また、部局たまつえの取組は、多くの表彰を受けることができた。しかし、今後も継続して取り組んでいくためには、模擬株式会社たまつえを軸に、組織化していくことが必要である。	コロナ禍の影響で限られた授業であったり、客層や人数が読みづらい面があった。しかし、その現状の中においても出来る工夫を検討していく。模擬株式会社たまつえについて、教員・生徒の面について分担していく。次年度は、組織化についての検討する場を設ける。	
	③県立商業高校開校への基盤構築	県立商業高校開校に向けて、各科における目標と教育内容の具体を明確にする。そのための試験的な取組を行い検証していく。教員の専門的な教育力の向上に繋がる研修の充実を図る。	C	県立商業高校開校に向け、各学科それぞれの特色・方向性や教育課程については準備が整った。しかし、その目標を実現させるための詳細な具体的設定と情報の共有が未だ乏しい状況である。また、さらに専門性が必要とされる教育内容であるため、各科目の指導力の向上が必要である。科目の特性と専門性ばかりに着目しがちではあるが、商業高校生として大切にしたいところである、基本的な生活習慣や礼法・敬語等も、原点に振り返り指導を徹底していく必要がある。	会計科においては、令和3年度より、ビジネス3学科については、令和4年度にスタートするが、来春4月にはすべての学科において学科長を配置していたが、目標実現のための具体的なかつ詳細な教育活動を設定していく。商業高校生として身につけさせたい基本的な生活習慣や言葉遣いや、社会で通用する人材の育成は、人間形成だけでなく教科学習や様々な部分まで影響する根本的な部分である。今一度、商業科教員が率先して、教科指導以前に徹底していく意識を持つ。	
情報科	①最新の情報科学を踏まえた学習指導の工夫	進展著しい情報技術を踏まえ、生徒の実態に合った丁寧な指導や教材の選択を行う。	B	今年度も課題研究などは学習分野が多岐に渡ったが、既存の設備や学習環境で対応することができた。社会人講座の活用などはできなかったが、書籍の準備やインターネット上の各種サービスを活用し、教材に活かした。	情報分野の進展は非常に早く、技術や機材、ソフトウェアの最新情報を入手し、活用できるように研修を重ねる必要がある。	
	②国家試験、検定合格率の向上	IPA主催の国家試験を中心に難関試験の合格を目指し、生徒の進路実現の一助となるように補習等の実施を工夫して行う。	B	数名の生徒は自身の進路の関係で受験をしたが、全員が合格できたわけではなく、課題が残った。	直接的に国家試験に関わる科目はないものの、この合格者が専門学校入学で優遇されている事実と将来のエンジニアの必須資格であることを踏まえ、出題分野を基準に各科目で割り振り、情報科科目全体で試験に対応できる体制を整える必要がある。	

A:十分である B:ほぼ十分である C:あまり十分でない